

法務の眼 Legal Eyesight

AIとの共創

グリーホールディングス株式会社
コーポレート本部 総務部 部長

松村真弓 (Mayumi Matsumura)

1 AIの加速

巷は生成AIの盛り上がりで騒がしい。かくいう私も論文の情報を集めたり、データを分析したりとAIを活用している。先日、個人的な興味で4コマ漫画、短い動画、歌を作ってみた。しかし、AIで集めた情報はあくまで参考情報であって、必ず資料の原文を自分で確認し、出所や前後の文脈を確認している。AIはまだ嘘つきだからだ。

最近加速した印象のAIだが、今回初めてムーブメントが起きたわけではない。1950年代に提唱され、3回のブームと2回の冬の時代を経ている（総務省HPより）。今回のムーブメントがより注目されているのは、実用化の発展が目覚ましいからではないだろうか？

私は2016年頃から、株主総会運営にデジタル技術を活用する取組みを行っている。この着手にあたっては、株主総会の歴史に加えて、インターネットやデジタル技術の歴史を紐解いた。新たな技術や仕組みの浸透には、幾度かのブームを経る必要があるようだ。バーチャル株主総会も同様の道を経て、スタンダードになっていくのだろう。

このように歴史と向き合い、紐解いていると、感覚的だが、AIの加速についてある程度予測がつくようになる。予測が当たるとか当たらないとかではなく、常に最新の動向をキャッチしようと、アンテナの感度に磨きがかかるというほうが近いだろうか。

今回のムーブメントも早くから察知し、2024

年の定時株主総会からAI活用を始めた。昨年の2025年定時株主総会では活用範囲をさらに拡大している。年に1度しかない定時株主総会での活用は、1度逃すと1年後になってしまうため、慎重かつ大胆な決断が必要となる。

さて、このままの流れで「株主総会とAI」をテーマに進めると、あと2万字ほどかかりそうなので、それは別の機会に譲るとして、本稿では、より根源的なテーマについて皆さんに聞きたい。AI時代の生存戦略について、

である。

2 AI時代の生存戦略

AI時代の生存戦略は、二つの段階に分けて考える必要がある。

一つはAIを使いこなす人としての生存戦略であり、人と人との競争における生存戦略ともいえる。

もう一つは人類vsAIの生存戦略であり、いわゆるシンギュラリティ（AIが人間の知能を超えて急速に進化する時点）に向けての生存戦略である。下記3以降にて各生存戦略の詳細について述べる。

なお、以下はあくまで私見なので、その点はお含みおきいただきたい。

3 人としての生存戦略

AIの利用ステップは、まず「触れてみる」ことから始まり、次に「活用する」、そして「使いこなす」段階へと進む。

しかし現在、そのフェーズはさらに先へと移行しつつある。単に「どう使いこなすか？」という技術論を超え、「使いこなすために、人はどうあるべきか？」という存在意義のステージに入っているのだ。

事務処理やデータ収集・分析といった、従来人間が担ってきたオペレーション業務はAIの得意分野である。こうしたタスクを他者に依頼する必要はなくなり、AIを利用し自分一人で完結できる時代が来ている。すなわち、これからの競争で生き残るのは、単に「手を動かす人」

ではなく、自ら「考える人」にほかならない。

では、この「考える人」になるためにはどうすればよいのか？

それは、自分が唯一無二の存在であると自覚することにある。この自覚を育てるには三つの要素が重要であると私は考えている。一つは個人の思想、哲学を持ち、それを信念に昇華させること、もう一つは事象を物語（ナラティブ）として描き、他者と共感することができること、最後に戦略的判断のもと決断を下すことである。

第一に、個人のバックボーンとなる「思想」や「信念」の有無が決定的な差を生む。AIは膨大なデータから最適解を導き出すことは得意だが、そこに「なぜそれを行うのか？」という独自の意志や倫理観は宿らない。自らの哲学という羅針盤を持たない者は、AIが提示する効率性の波に呑み込まれ、主体性を失ってしまうだろう。

第二に、断片的な事象をつなぎ合わせ、「物語（ナラティブ）」へと昇華させることである。ストーリーが固定された筋書きであるのに対し、ナラティブは語り手の感情、心情、解釈によって内容が変わる。一人ひとりの経験や視点が反映されるため、同じ出来事でも人によって異なる、唯一無二の物語を生むことができる。主体的に自分事として物語を紡ぎ、自分の言葉として伝えるからこそ、熱量と体温のある言葉が、他の人の心を動かし、行動へと駆り立てる。

第三に、リスクを背負って決断することである。AIは選択肢を提示するが、最終的な責任はとらない。リスクテイクの度合いも最適解の選択肢も、自らが自らの上司となり選択していくのだ。この決断の積み重ねが、さらなる経験を生み、自覚を育てあげる。

もはやロールモデルを探している暇はない。自らがロールモデルに、いや、唯一無二の存在であることを自覚することが重要となる。そして、これらは次の生存戦略にもつながるのである。

4 人類 vs AI の生存戦略

学習を重ね、人間に近づけば近づくほど、AIが人類にとって脅威になりかねない。現時

点のAIは、まだ間違っただけをもっともらしく回答する。この段階では何が正しいかを人類が見極める必要があり、AIより人は優位に立っているといえる。

しかし、これだけ実用化が進んでくると、AIの学習も進み、正しい回答を導き出すという点について、AIが人類を追い越す日もそう遠くないように思う。この進化はシンギュラリティ（Singularity）という仮説につながっている。これは一般的に技術的特異点といわれ、AIが自律的に自己フィードバックで改善を繰り返し、人間の知能を超える瞬間が訪れるというものである。アメリカの未来学者であり、AI研究の権威であるレイ・カーツワイル氏によって提唱された。シンギュラリティによって、それまでの常識や人間の理解を超えた変革が起こり、AIが人類を超える瞬間になるかもしれない。

しかし、恐れることはない。その段階においても、AIに対し人類が持つ優位性が一つある。それは、人生が有限であること、すなわちわれわれはいずれ「死ぬ」ということだ。AIは死なない。この違いはとてつもなく大きい。

有限を生きる人類にとって、この一瞬、この瞬間がどれだけ愛おしいかを、AIが真に感じることはない。仮に将来、人間の記憶や能力がデータ化され、何かしらの媒体に保存されることがあっても、老いていく身体から離れた瞬間に有限を生きる愛おしい感動は失われる。伝わるだろうか？

この愛おしい感動があるからこそ、人類は五感で感じ続け、思想し続け、時には死と引き換えにしてまでも、一瞬を生きようとするのだ。それは歴史が物語っている。少々哲学的な表現になってしまったので、具体例を挙げよう。

第一に、最後の1回に込める「魂の震え」である。AIにとって、1回目の実行と100万回目の実行に価値の差はないだろう。しかし、人間は違う。「これが最後の演奏になるかもしれない」と悟った老ピアニストが鍵盤に落とす指先には、技術を超えた、祈りに似た何かが宿る。終わりを意識することで生まれるこの「一期一会」の重みは、AIには決して真似できない。

第二に、合理性を捨てた「自己犠牲」である。

AIは常に生存確率や効率を計算するだろう。しかし、人類の歴史を動かしてきたのは、ときに自分の命や利益を顧みず、誰かのために、あるいは真理のために身を投じるという「不条理な情熱」である。死を恐れながらも、死をも辞さぬ覚悟で何かを守ろうとする瞬間の輝き。その矛盾に満ちた高潔さは、有限な生を生きる者にしか許されない、もっとも人間らしいバグ(エラー)なのだ。

第三に、身体の衰えから生まれる「慈しみ」である。AIは劣化しない。しかし、人類は、昨日までできたことが今日できなくなるという「老い」や「病」を通じて、他者の痛みを自分のこととして実感し共感することができる。AIには、欠けていくことの切なさも、それゆえに手を取り合おうとする切実さも、データとして処理はできても、実感することはできない。

5 AIとの共創

私たちが手に入れたAIは、人類の生活を劇的に変え、今この瞬間も加速度的な発展を続けている。しかし、その進化は決して人間の不要を意味するものではない。むしろAIこそが、私たちの「人間らしさ」を鮮烈に際立たせる鏡となるのだ。

人類は今、「答えを出す存在」から「問いを立てる存在」へと進化の時を迎えている。AIは過去の蓄積から最適解を導き出すが、現状を疑い、よりよい未来を構想し、新たな問いを産み落とせるのは人間にほかならない。私たちは自らの哲学と信念を羅針盤に、AIという強固な翼を使いこなしながら、「われわれはどこへ向かうべきか?」と問い続けていく。

この思索の軌跡はAIという無限の記憶に刻まれ、肉体が減じた後も、未来を生きる誰かの血肉となってゆく。10年後、あるいは50年後の誰かが私の信念に触れ、共鳴するその瞬間のために。

AIが人類の英知をつなぐ最強の「知の器」となることを、私は信じてやまない。